**２０２１年１０月３日　主日礼拝**

**説教題「主イエスの名で立ち上がり、歩く」使徒言行録3章1～10節**

**主任牧師　加藤　誠**

**「ペトロは言った。『…イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。』…すると、たちまち、その男はくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った」。」（使徒言行録３章６－８節）**

ほぼ９ヶ月ぶりの分散礼拝。ほんとうに長い間、この時を待ち続けてきました。このように新しい礼拝堂に共に集い、礼拝をささげられる、この時を整えてくださった主に感謝したいと思います。感染ということではまだまだ気を緩めることはできませんし、「第六派」は必ず来るということですから、感染防止にしっかりと努めながら、一回一回の礼拝を「神さまから招待状をいただいてあずかることのできた礼拝」として大切に受けていきたいのです。

ルカ福音書１４章で、主イエスが「大宴会のたとえ」で語っておられますけれども、神さまは私たちに「僕（しもべ）」を送って「もう用意ができましたから、おいでください」と招いておられます。神さまの宴会（喜びの食卓）に招かれているのだから「何かお祝いを包まないと」とか、「何か手土産でも持っていかないと」と人間的には考えるのですが、神さまは「宴会に参加する者はこれを持ってくるべし」というような条件を一切課しておられません。求めておられるのは一つだけ。「招待を受けて宴会に出席すること」「神さまが用意された喜びの食卓の席に就くこと」です。食卓の準備はすべて神さまの側で整えてくださいました。主イエスが十字架においてすでに救いのみわざを成し遂げてくださったのです。神さまが私たちに求めておられるのは「神さま、主イエスがあらわしてくださった神さまの愛をありがとうございます。ぜひ、わたしも喜びの食卓に参加させてください」と、神さまの愛の招待状を両手で大切に受けていくことです。

ところが「大宴会のたとえ話」の中で、人びとはそのせっかくの招待を断るのです。いろいろな理由を付けて。「畑を買ったので見に行かねばなりません。失礼させてください」、「牛を二頭ずつ五組買ったので調べに行くところです。どうか失礼させてください」、「妻を迎えたばかりなので行くことができません」。どれも人間的には大切な理由です。畑を買うにしても、牛を十頭買うにしても、妻を迎えるにしても、それぞれ人生を左右する一大事です。なおざりにできません。けれども神さまがその独り子イエス・キリストの命を通して現わされた、神さまの大きな愛の招待を後回しにしても大切な理由と言えるかどうか、私たちはよくよく考えなければならないのです。

新型コロナウィルスの感染症のパンデミックによって、私たちがそれ以前の生活で「当たり前」だったことのほとんどにストップをかけられました。ある意味でそれは貴重な立ち止まりの時、見つめ直しの時になったのではないかと思います。あらためて「日曜日に教会に行って礼拝するとはどういうことなんだろう。ほんとうに自分の中で大切な、無くてならないものなのだろうか」と、日曜日に教会に行くことができない／行かなくてもよい状態になって、それぞれ自分の信仰というものを問われたのではないでしょうか。オンラインの礼拝といっても、自分の都合でいくらでも時間をずらすことができます。大井教会の礼拝ではなく他教会の礼拝をのぞくことも可能です。それで誰かから叱られるわけでも、神さまから罰が課せられるわけでもない。それぞれの自由です。わたしの意思で何でもできてしまう、そういう日曜日。その日曜日に、なぜ私たちはそれぞれの生活を後ろに置いて、教会に集い、教会の礼拝を一緒にささげるのでしょうか。

聖書が示している理由は一つだけ。「神さまが私たち一人ひとりのもとに僕を送って『もう用意ができました。どうぞおいで下さい』と、招待状を届けてくださっているから」です。「今日、主の日。イエス・キリストが墓を打ち破って神の愛と希望の命をあらわされた日。あなたにも共に喜びの食卓に就いてほしい」と、神さまが熱く熱く招いてくださっているからです。

今朝、ご一緒に読んだ使徒言行録３章は、エルサレム神殿の「美しの門」に置かれていた、生まれながらに足の不自由な男を、ペトロが「イエス・キリストの名で」癒した箇所です。この男は「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩みなさい」という言葉を聞いて、躍り上がって新しい生活に招き入れられました。その彼が一番最初にしたのは、ペトロとヨハネと一緒に神殿の中に入って神さまの御名をほめたたえて礼拝をささげることでした。

わたしはこの箇所を改めて読み直しながら、「イエス・キリストの名で立ち上がり、歩みなさい」というペトロの言葉は、まさにわたし自身に向けられている言葉として聴きました。私たちは「2021年の日本と世界」という現実に生きています。その現実とは、先ほどのたとえ話の「畑や牛を買ったり、妻を迎えたりすることに大きな価値を置いている」現実です。この社会で生きていく以上、その現実を軽んじた信仰生活はありえません。けれども、その私たちに神さまは呼びかけるのです。「畑や牛を買ったり、妻を迎えることを大切にするがゆえに、まず主イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と。「主イエスの名によって立ち上がり、歩む」とは、私たちを取り囲んでいる現実の課題をイエス・キリストの恵みと愛で受け、立ち上がり、歩むことです。わたしの小さな頭脳と狭い視野で「こうでなければダメ」と決めつけてしまうのではなく、主イエスの恵みによって受け、神さまの愛で取り組み、聖書が指し示す希望に顔を向けて歩むことです。日曜日は聖書を開くけれど、月曜日から土曜までの現実の課題はこの世の論理で取り組むというような「二元論」（信仰と現実を使い分ける）ではなく、お金や仕事、人間関係など、大切な現実の課題だからこそ、「主イエスの名で受けて立ち上がり、歩みなさい」と聖書は私たちを招いているのです。

新型コロナウィルスの課題はまだまだ続きます。心配なこと、不安なこと、心痛めることが世界にあふれています。だからこそ、神の愛の招待状を受け取り、「主イエスの名」で立ち上がり、歩む力をいただいていきたいのです。